NO. 1

澤柳政太郎研究の目途と課題

庄司和晃

(2012.10.6(土) 全国研例会にて。)

一　澤柳研究会の初心と構想

主として澤柳研究会の成果に基づきながら展開してみたい。まず、この研究会のおおよそについてふれておくことにしよう。

「成城学園澤柳政太郎研究会」(略称・澤柳研究会)が発足したのは一九七一年四月であり、その「発意」とするところはつぎのごとくである。いわば初心である。

「今日は、まさしく教育革新の時代であります。現在ほど〝教育とは何か〟が根本的に問われているときはないとさえ申せましょう。ここにおいて想起致しますのは、澤柳政太郎先生のことであります。数々の業績の中でも日本の教育界に、実際的研究の気風を樹立されましたことは、看過することのできない特筆に価する事柄であると思います。晩年の事業ともいうべき、実験学校としての成城小学校の創設は、この気風の具体的なあらわれの一つであります。従いまして、澤柳先生の唱道されました実際的研究の真意をくみとり、今時点よりあらためて見直してみることは、今日の教育革新のありかたを考究し推進する上に有力な働きをなすものと信じます。

ところで、成城学園は小学校を起点として一大総合学園にまで発展致しましたが、中心の支えとしておりますのは、申すまでもなく澤柳先生の思想・精神であります。しかしながら、澤柳先生についての文献等が整備され、諸研究が十全に行なわれているかといいますと、はなはだ反省の念を持たざるをえないのであります。これでは学園教育の精神的支柱に関する研究がいささかお留守になっていると他より言われましても返すことばもない状況であるといわなければなりません。そこで、この現状を打破し、『澤柳研究』の呼称のもとに総合的研究の気運のもりあがりを念願するに致ったのであります。直接には、『学園教育の源流をさぐり、実際教育の足場を見つめるとともに、その精神を再認識し、今に生かしきっていきたい』という意図から生まれたものでありますが、ゆくゆくは世の研究者にも利用の便を供しうる『澤柳研究』の拠点たらしめたいとも考えているしだいであります。

そのためには、何といいましても、文献等の資料の整備こそ急務といわなければなりません。さいわいに、学園には澤柳先生の蔵書をはじめ、教育史的にも価値のある自筆原稿・各種の覚えがき類・写真・書簡・そのほかの貴重な資料が多数残されてあります。しかし、蔵書をのぞいては、作製された目録もなく、また製本をほどこされることもなく、未整理のままに、数か所に分散している状態であります。さしあたっては、小学校の一室に澤柳研究室を仮りに設置し、ここにまとめ、管理保存し、目録や研究季報をつくることなどをやって、研究上の地固めを行なう所存であります。同時に学園にない研究資料や不足している資料等を手に入れる仕事も進めなければなりません。ふりかえってみますと澤柳全集と遺稿集にはいっていない発表文献は意外に多いのであります。これらを蒐集するとともに、さらに澤柳先生を知るご存命の方々には、聞きとりなども是非とも行ないたいと計画致しております。そして一方では、『澤柳研究』の構想案を練りつつ、可能なところから研究そのものに着手したいと考えているわけであります。

何とぞ、以上の発意をおくみとりの上、事の多少にかかわらず、資料の整備と研究の推進にご援助ご参加くださいますようお願いするしだいです。」(妹尾一三・馬場正男「『澤柳研究』の発意について」『澤柳研究』第一号)

この発意のもと、委員会が組織され、①関係資料の蒐集保存、②共同研究や個人研究の推進、③澤柳研究会(例会)

の開催、④澤柳研究双書の刊行、⑤機関誌『澤柳研究』の発行、⑥澤柳研究室の充実と管理等の主要な仕事が進められた。

その際の研究上の構想はつぎのしだいである。

I　著作論
- 「実際的教育学」の価値
- 澤柳政太郎の「教育学批判」
- 澤柳政太郎の「孝道」論
- 澤柳政太郎の「公私学校比較論」
- 澤柳政太郎の「学修法」
- 澤柳政太郎の「教師・校長」論
- 「児童語彙の研究」と澤柳政太郎
- 「成城小学校創設趣意」と澤柳政太郎
- 澤柳政太郎の「文化的汎亜細亜主義」

II　教育史的研究
- 澤柳政太郎と現代の教育学
- 日本の教育と澤柳政太郎（澤柳政太郎と日本の教育）
- 自由教育の思想と澤柳政太郎
- 澤柳政太郎と大正期の新教育運動
- 澤柳政太郎の教育観
- 自学の教育思想と澤柳政太郎
- 世界教育史上からみた澤柳政太郎
- 澤柳政太郎の教育学説
- 日本教育史上における澤柳政太郎
- 澤柳政太郎と信濃教育
- 澤柳政太郎と成城小学校
- 澤柳政太郎の学説をめぐる教育論争
- 帝国教育会と澤柳政太郎（教育行政面も）

III　思想形成・人物関係
- 澤柳政郎太とペスタロッチ
- 澤柳政太郎とデューイ
- 澤柳政太郎とパーカスト
- 澤柳政太郎とヘルバルト学派
- 澤柳政太郎の翻訳書
- 澤柳政太郎と新カント派理想主義
- 澤柳政太郎と教師群
- 澤柳政太郎と小西重直
- 澤柳政太郎と長田　新
- 澤柳政太郎と小原國芳
- 澤柳政太郎をめぐる人たち
- 自由主義の思想と澤柳政太郎
- 澤柳政太郎の思想形成
- 澤柳政太郎の宗教観

- 澤柳政太郎の倫理道徳観
- 澤柳政太郎の仏教思想
- 澤柳政太郎の政治論
- 澤柳政太郎の皇室観
- 澤柳政太郎の文化政策観
- 澤柳政太郎の東洋主義

IV　生涯研究
- 澤柳政太郎の生涯と業績
- 澤柳政太郎の一生
- 澤柳政太郎のおいたち
- 澤柳政太郎の少年時代
- 澤柳政太郎の青年時代
- 澤柳政太郎の文部官僚時代
- 澤柳政太郎の文部局長・次官時代
- 澤柳政太郎と教科書事件
- 澤柳政太郎と京大事件
- 澤柳政太郎の総長時代
- 澤柳政太郎の成城教育時代
- 澤柳政太郎の晩年
- 澤柳政太郎の外遊

V　学問論
- 澤柳政太郎の学問観
- 澤柳政太郎の研究観
- 澤柳政太郎の科学観（田辺元の科学概論なども）
- 澤柳政太郎の教育研究観

VI　実際教育
- 澤柳政太郎の教育改造論
- 盲語教育と澤柳政太郎（国語教育・英語教育・ローマ字教育など）
- 芸術教育と澤柳政太郎（美術・劇など）
- 科学教育と澤柳政太郎
- 小学教育と澤柳政太郎
- 中学教育と澤柳政太郎
- 専門学校と澤柳政太郎
- 大学改善案と澤柳政太郎
- 国際教育論と澤柳政太郎
- 澤柳政太郎の学校経営
- 澤柳政太郎の児童観
- 澤柳政太郎の教育学建設
- 低学年教育と澤柳政太郎
- 澤柳政太郎の成城小学校観
- 徳性の教育と澤柳政太郎
- 道徳教育と澤柳政太郎（「修身科」論など）
- 知識技能の教育と澤柳政太郎
- 身体の教育と澤柳政太郎

・澤柳政太郎の発育観
・書、書簡の研究（額にあらわれた文字など）
Ⅶ　前　提
・これまでの「澤柳」研究
・完全なる「全集」の刊行
・詳細なる「年譜」作り
・澤柳研究室の整備
・伝記・評伝・思い出等の集積
・聞きがき・座談会による記録など
（庄司和晃『澤柳政太郎研究』の構想案」・『澤柳研究』第一号）

因みに、この構想を踏まえながら開催された澤柳研究会（例会）の主題と講演者・報告者の一覧を掲げてみるとつぎのとおりである。

第一回研究会（一九七一・六・三〇）
・「教育研究の課題と将来―澤柳政太郎を中心として―」
・新田貴代氏講演（元横浜国立大学講師）
・機関誌『澤柳研究』第四号所収
第二回研究会（一九七一・七・八）
・座談会「澤柳先生と初期の成城」
・出席者、真篠俊雄・斎田喬・赤井米吉・小野賊悟の各氏（旧職員）
・『澤柳研究』第六号所収
第三回研究会（一九七一・一〇・二一）
・「澤柳政太郎と『実際的教育学』―その史的価値と問題点について―」
・水内宏講演（都留文科大学講師・現千葉大学助教授）
・『澤柳研究』第七号所収
第四回研究会（一九七二・七・六）
・「澤柳政太郎の教育史的意義」
・中野光氏講演（和光大学教授・現立教大学教授）
・『澤柳研究』第一二号所収
第五回研究会（一九七二・一二・一一）
・「明治の教育学と澤柳政太郎―教授理論史研究の視点から―」
・稲垣忠彦氏講演（東京大学助教授）
・『澤柳研究』第一五号所収
第六回研究会（一九七三・二・二六）
・「澤柳政太郎の教育思想について」
・中内敏夫氏講演（お茶の水女子大学助教授・現同大学教

授）
・『澤柳政太郎研究』（『澤柳研究』改題）第二〇号所収
第七回研究会（一九七三・三・九）
・「澤柳政太郎の仏教思想について」
・鈴木美南子氏講演（フェリス女学院大学講師・現同大学助教授）
・『澤柳研究』第一六号所収
第八回研究会（一九七三・四・二〇）
・「澤柳政太郎と低学年理科」
・長谷川純三氏講演（練馬区大泉中学校教諭・現石神井東中学校教諭）
・『澤柳研究』第一七号所収
第九回研究会（一九七三・五・三）
・「中村春二と澤柳政太郎」
・中村浩氏講演（元九州大学教授）
・『澤柳政太郎研究』第二一号所収
第一〇回研究会（一九七三・六・二一）
・「澤柳先生の思い出と『自然研究』」
・蔭山盛吉氏講演（旧職員）
・『澤柳政太郎研究』第二二号所収
第一一回研究会（一九七三・七・六）
・「処女作『公私学校比較論』をめぐって」
・報告者、庄司和晃・斎藤幹夫・竹下昌之・田沢与光の各氏（成城学園初等学校教諭・庄司は現大東文化大学助教授）
第一二回研究会（一九七三・九・一三）
・「澤柳政太郎と児童教学教育」
・八島正雄氏講演（旧職員）
・『澤柳政太郎研究』第二三号所収
第一三回研究会（一九七三・一〇・二九）
・「大正六年という時点―白樺教育の思想と澤柳政太郎の思想（その一）―」
・今井信雄氏講演（成城大学教授・現成城短期大学主事）
第一四回研究会（一九七三・一一・二九）
・「『実際的教育学』解明へのアプローチ（その一）」
・竹下昌之氏講演（成城学園初等学校教諭）
・『澤柳政太郎研究』第二四号所収
第一五回研究会（一九七三・一二・一七）
・「澤柳政太郎の教師論をめぐって」
・寺崎昌男氏講演（野間教育研究所員・現東京大学教授）
・『澤柳政太郎研究』第二五号所収
第一六回研究会（一九七四・一・三一）
・「澤柳政太郎の方法―①成城初期の研究方法論―」報告者、庄司和晃・野村兼嗣・日下部山・上廻昭の各氏（成城学園初等学校教諭・庄司は現大東文化大学助教授）
第一七回研究会（一九七四・二・一五）
・「澤柳政太郎の方法―②『現代教育の警鐘』にみる方法論―」

実行した人である。その点では正当な論争家であった。『教育学批判』や『実際的教育学』は論争の書といってもさしつかえない。

澤柳の研究方法論を問題にするときには、右のごときの面をも忘れてはなるまいと思う。

四　澤柳政太郎研究の意義

ともあれ、澤柳政太郎はまれにみる研究方法論の持ち主であった。教育学者の中でかれほど方法論の形成を自覚的に進めた人はいないのではなかろうか。明治後期という時点で見返すならばその念の入ったやりかたに一驚するであろう。まさに目を見はらざるをえないのだ。著書論文のほとんどは方法の書といってもさしつかえないほどである。

明治後期に日本人のつくりだした科学的方法論である。澤柳のひそみにならっていえば文字どおり現実ととりくむ「実際的」方法論なのだ。

それは単に教育研究や教育学研究上においてのみ重要なのではない。日本の科学思想史や社会科学史においても重要なのだ。あれほどのものをあの時期においてつくりだしたということは特筆に価することである。澤柳の方法論はそうした科学思想史や社会科学史という方面からもあらためて見直されてしかるべきであろう。いってみれば、日本における自然科学史上の長岡半太郎のありように匹敵するとさえいえよう。

なかんずく、「教育学改造の急務」「教育学の性質及び其の研究法」「批評的研究に就て」「教育学批判」「問題のつかまへ方と研究の方法」「再び問題の捉え方と研究方法について」「成城小学校と教育の研究」などには、澤柳の方法為が直接的に、しかももっとも鮮列な形ででている。それらの集成ともいうべきものが『学修法』であり『実際的教育学』である。そのしののめは処女作『公私学校比較論』にすでにあらわれている。この書は見ようによっては実に冷徹な叙述である。教育現実を見据えたまなこで一貫されているのだ。あれほどにきびしい宗教的行為を積んだ人が、いかにして、科学的方法論を持ちえたかということは一つのデカイなぞである。その解明の主要な手がかりはおそら

く実務的な仕事に理想をもって従事したことにあるといえよう。目白僧園の維持運営、教育行政家、総長とか校長とかの履歴、そこにおいてああでもないこうでもないとうろちょろするのでなく、決断しなければならぬという現実に直面していたことが必然的に科学的にならしめた有力な因子ではないかと思う。

澤柳のは「方法」のひとり歩きではない。常に現実の問題に即して、それを通しての方法論の指示なのだ。そこに、積極面もあればまた反面、相対的に独立した科学方法論ないしは論理学としての形成の弱さを感じないわけにはいかないし、そこがまた口おしくも思うところであるが、このことはあとから歩む者にやりがいのある大きな仕事を残してくれたと受けとめた方がいいであろう。

澤柳の方法論はある意味では常識的である。すらっとみれば何でもなさそうにみえる。あたりまえなことだともいえる。が、そこがすばらしいのだ。比喩的には子ども的目といってもいい。すなおさである。直視力である。だからこそ肝心なところをさっと捉えるのだ。真相づかみのうまさである。発展のキイポイントをみごとに指示しうるのもそうした子ども的眼力のなせるわざだ。当時、輸入紹介的教育学者や観念論的教育学者をしてふるえあがらせたのもかくのごときの子ども的見破りのたしかさにある。裏を返せば、澤柳のはまことに役に立つ方法論なのだ。科学的だからである。

日本における科学の受容、そして科学的思考法の発達史において、長岡半太郎の占める位置は実に大きい。西欧に身を投じてかれらの科学を生みだす力のみごとさにびくつき、東洋人に果たしてそれだけの研究能力あるやと悩みぬいた内面的志向があるからだ。福沢諭吉にみる科学の導入・利用・方便的活用といったありかたから、科学を生みだしていくという創造的なとらえかたへの転回点があるからでもある。澤柳のはこのありかたに思想史的に直結しているのだ。

研究の方法論を持つということ。それの意味するものは何なのか。一言もってこれをいえば、創造的な仕事をなしとげようとする内的姿勢の表示にほかならぬ。できあいのものを利用・応用する立場ではないのだ。成城の伝統的な用語にしたがえば、「独創的研究」をなさんがためのいとなみである。

こうしたことからいっても澤柳の方法論的自覚の有する内的意味はとてつもなく大きいと称してよいであろう。

澤柳研究の全貌を単純化していえば、蒐集・理解・建設の三点につきる。資料の「蒐集」とその保存は重要である。理解や建設の土台だからだ。その点で、このたびの澤柳の新全集の企画推進などはまさにこの面の大仕事である。開催してきた先のごときの研究会などは主として「理解」にはいる。澤柳はその一生をかけて何とどうたたかったのか、そして何を打ちたてようとしたのか、史的価値はどうか、今後への教訓は如何、等々は理解分野だ。これはこれで意味のあることではあるが、これのみではだめである。見直し・見返し・解釈・理解のみでは、現実が動くとはかぎらないからだ。重要なことは教育現実の数歩前進である。これがすなわち「建設」にあたる。教育現実をヨリよく変えていかなければならぬ。教育改造である。そのためには澤柳を理解し、その積極面を読みとり、それをまともに受けとめなければならぬ。澤柳の果たそうとした真意をくみとって背負っていかなければならぬ。そう、私どもが背負おうということ。それが教育現実を動かす機縁である。背負うことがなければ、いかによく理解してもどうということはない。悪くいえば対岸の風景であり、建設的な事業とはならぬ。判断をくぐりぬけての決意・決断がなければ、教育現実の進歩は望めるものではない。

かくして澤柳の意図した教育学の樹立をはかっていくということ、ここに研究の究極的意義が存するといってよいであろう。

澤柳政太郎全集　別巻

澤柳政太郎研究

1979年5月30日　初版発行©　検印廃止

著　者　澤柳政太郎

編　集　成城学園澤柳政太郎全集刊行会
会長　絲尾一三

発行者　長宗泰造

発行所　株式会社　国土社
東京都文京区目白台 1-17-6
郵便番号112　Tel.(943)8721
振替　東京 6-90631

印刷所　株式会社　厚徳社

[P.251～289]

No.20

澤柳政太郎研究の目途と課題

項目一覧

一　澤柳研究会の初心と構想

二　研究上で課題とすべきこと。その一

(1) 澤柳教育と小原教育の問題
(2) 問うべき澤柳教育の真価
(3) 明治貴族による教育改革
(4) 澤柳における仏教思想
(5) 仏教思想と教育思想
(6) 日実際的教育学派の「実際」という概念

三　研究上で課題とすべきこと。その二

(1) 具体験的研究の方法
(2) 数々の証言を宿すもの
(3) 低学年理科の成功と発展
(4) 澤柳の精神を彷彿させるもの
(5) 植民地教育への発言
(6) 創設趣意書の執筆者
(7) 日公私学校比較論の一背景
(8) 全巻揃った研究業績書
(9) 格調の高い「澤柳教育」
(10) 成城教育とのかかわり
(11) 「批判」学と称すべきもの

四　澤柳政太郎研究の意義